

戦後初期の学校における教育の理念に関する考察

Consideration of Educational Philosophy at Japanese Schools after the Second World War

村井 万寿夫 (人間科学部こども学科教授)

Masuo MURAI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

戦後初期に民主主義の教育を実現しようと学校全体でカリキュラムを構成した学校の教育課程（彌生プラン、明石プラン、金大附小プラン）に見られる教育の理念や目標、計画などについて考察した。その結果、3つのプランに共通の教育の理念として「子ども中心の教育」の考え方があり、子どもの生活全体を重視する「中心学習」とその周辺に配置される「基礎学習」の2つから成り立っている。教育の特徴は「自分・友達」→「地域・町」→「市・県」→「日本・世界」と学習対象が広がっていくことなどが明らかになった。また、戦後初期の学習論について現在の学習論と比較考察することにより、カリキュラム編成の拠り所となっているものは子ども中心の経験主義すなわちコア・カリキュラムの考え方である。コア・カリキュラムに見られる学習論は「問題解決学習」でありその後には台頭したのが「系統学習」である。現在では問題解決学習と系統学習の長所を取り入れた学習論となっていることが数学・算数の教科書分析からも認められることを示した。

〈キーワード〉

戦後教育、教育理念、教育課程、カリキュラム、学習論

1 はじめに

1-1 戦後初期の教育の理念

文部省（1946-1947）の『新教育指針』の第一部後篇「新日本教育の重点」第一章「個性尊重の教育」において、「個性とはどういふものであるか、そして軍国主義及び極端な国家主義が、いかに個性をおさへたか、したがって新しい日本を建設するために、国民各人の個性をのばすことが、いかに大切な土台であるか」⁽¹⁾と、個性を伸ばすことの重要性について示している。また、教育の目的について「教育は人間を人間らしく育てあげることが目的とする。人間らしく育てあげるといふのは、人間性をおさへずゆがめず、に発展させて、りつぱに仕上げることであり」⁽²⁾と明示している。

「個性を伸ばす」ことに関しては、1947年の学習指導要領（試案）一般編の第三章教科課程において「自由研究」を設けた理由を次のように説明している。「児童青年の個性を、その赴くところに従って、のばして行こうというのであるから、そこには、さまざまな方向が考えられる。ある児童は工作に、ある児童は理科の実験に、ある児童は書道に、ある児童は絵画にというふうに、きわめて多様な活動がこの時間にいとまれるようになる。」⁽³⁾

新教育指針や学習指導要領（試案）は、アメリカ教育使節団報告書（以下「報告書」と称す）がもとになっている。中野・平原（1997）は報告書について「『未来を担う子ども』を教育の中心に置き『自由の雰囲気』と『民主主義の精神』を基調にし、教師の教授の自由やカリキュラム編成・教材選択の自由、教科書国定制の廃止、文部省権限の削減と公選制教育制度の創設、6・3・3制学校体系の採用など、学校制度、教育行政、教育内容・方法の全面にわたる改革案を提示した」⁽⁴⁾と述べており、教育の理念として「子どもを教育の中心に置く」考え方を確認できる。

報告書では「民主主義による生活のための教育制度は個人の尊厳と価値との承認の上に基礎を置いてある」⁽⁵⁾と示し、教育の理念が「個人の尊厳と価値」であることがうかがえる。寄田・山中（2002）も「報告書は、民主主義の基本理念を中心に教育改革の全面的な提言を行った。その内容は、教育の理念として個人の価値と尊厳、教育および研究の自由を掲げ」⁽⁶⁾としていることから、「個人の尊厳と価値」が教育の理念であることが分かる。

1-2 戦後教育のカリキュラム

安彦（1999）は戦後の教育について、カリキュラムの視

点から「戦後は、第二次世界大戦直後の10年間ほどに、最もはなやかなカリキュラム研究の時代が出現した」と述べるとともに、「アメリカのカリキュラム研究の紹介を中心に、(中略：筆者)カリキュラムをどうつくるか、その構成論が非常な高まりを見せた」⁽⁷⁾と述べている。この時期に大きな影響力があったのが梅根悟である。

梅根は、戦後の日本の教育改革運動の重要な担い手であった。「カリキュラムという言葉は学校で教える学科の中味やその順序をあらわした教育内容の計画という意味に使われるようになったのであります」とした上で、「文部省では、『教科課程』あるいは『学科課程』と訳して使っていますが、教科課程よりも、教育課程の方が日本訳としてはいいようであります」⁽⁸⁾と述べ、コア・カリキュラム運動を展開した。

船山(1960)は、「カリキュラム運動に拍車をかけたのは、1948年10月に発足した、コア・カリキュラム連盟の運動である。コア・カリキュラムというのは、生活現実の問題解決を学習する中心課程(コア・コース)と、それに必要なかぎり基礎的な知識や技能を学習させる周辺課程とから編成されるカリキュラムであって、しかも中心課程が一段高い地位をしめるものとされた」⁽⁹⁾と述べている。

これを反映させたものの一つに兵庫師範女子部附属小学校(1949)による「明石附小プラン」がある。「教育は人間の生活過程である」を理念に、「かくて我々は學校に於ける兒童の學習過程が、兒童の成熟に即した現実の生活過程であるが如くカリキュラムを構成すると共に、問題解決の過程を生活學習の中心にすえることにした」⁽¹⁰⁾として、中心学習(中心課程にあたる)と基礎学習(周辺課程にあたる)からカリキュラムを構成している。

石川県において同様のカリキュラム構成を行っているものとして「石師彌生プラン」がある。石川師範學校男子部附属小中學校(1948)による「石師彌生プラン 計畫と實際篇(昭和二十三年度・試案)」であり、巻頭(序)において当時の橋本芳契主事は、「人間の形成は人間の生活全体の形成で單なる知識修得の指導であつてはならない。兒童や生徒のうちに基盤を求めて、その生活を全体として發展させることによって、社会の要求する生活を形成していかなくてはならない」と、教育の理念に関して述べた上で、「兒童の生活は生きた統一ある全体的な一つの生活であるべきである」「私共の教育を眞に満足できるものになりたい」「こうした念願が本プラン構成の最も根本な動機になったのである」「この『彌生プラン』は核心教科課程(コア、カリキュラム)の立場に立つものである」⁽¹¹⁾と述べている。

このことから、戦後の教育改革の動きが金沢においても具体化されていたことを確認することができる。

よって、本研究では石師彌生プラン(以下「彌生プラン」と称す)の内容について考察を行うとともに、適宜、明石附小プラン(以下「明石プラン」と称す)と比較検討しながら考察を進める。

なお、コア・カリキュラムは、1950年代において「コア・カリキュラム論争」⁽¹²⁾が展開される。矢川(1950)による『新教育への批判』において、「かつてベスタロッチは、具体的な生活経験が人間を作るということを、『生活が陶冶する』“Das Leben bildet”という有名な言葉で現した。このモットーは梅根氏はもちろん、コア・カリキュラム論を支持するすべての教育家たちが金科玉条としており、それによって自分たちの『経験カリキュラム』を権威つけている」「経験カリキュラムによる教育は自然成長的・社会的形成であり、個人主義的自由教育である。この『経験』は個人個人の経験であって、それ以上のものではない。これは全く『はいまわる』経験主義である」⁽¹³⁾と批判した。これにより、「コア・カリキュラム論にたいする批判は、いわゆる進歩派の呼びとからだけでなく、文部省側からもなされた」⁽¹⁴⁾のである。

本研究においてはこの論争について深くは言及せず、戦後初期の民主主義の教育を実現しようと学校全体でカリキュラムを構成した資料(「彌生プラン」「明石プラン」など)をもとに、教育の理念や目標について考察することを視座とする。ただし、コア・カリキュラムが生活現実の問題解決を学習することを核にしていたこと、すなわち、経験を重視する考えに立っていた点においては、国分(1956)が指摘する「戦前の日本の教育では、主として知識の方だけを大事にしました。これはまちがいでした。ところが戦後は、主として経験の方ばかりを大事にしたのです。これもまちがいです。なぜこの二つの対立が起こったかと言えば、それは知識が眞の知識でなかったから」⁽¹⁵⁾であることに注視しておきたい。矢川もまた「カリキュラムの構成にあたっては理論と実践との統一が重んじられなければならない」⁽¹⁶⁾と述べている。

2 研究の目的

戦後初期に民主主義の教育を実現しようと学校全体でカリキュラムを構成した学校における教育課程を中心に教育の理念や目標、計画などについて考察するとともに、現在の学習論と比較考察することを目的とする。

3 研究の方法

彌生プランをもとに、次の観点から考察を行う。まず、教育の理念や目標をどのように捉えて(設定して)いるか。次に、それを具体化するためにどのような教育課程を編成しているか。さらに、各学年の単元を通観しながら教育の

特徴を見出す。これらの観点から考察を行うとともに、各観点の考察時に明石プランや金沢大学石川師範学校附属小学校研究叢書「教育課程表」（以下「金大附小プラン」と称す）と比較したり現在の学習論と比較したりすることにより、類似点や差異点について言及する。

4 研究の結果

4-1 教育の理念や目標の考察と比較

彌生プランの巻頭（序のページ）に述べられている橋本主事による文章から、教育の理念や目標に関して次の4点を挙げることができる（下線：筆者）。

- ・ 人間の形成は人間の生活全体の形成で単なる知識修得の指導であってはならない。
- ・ 児童や生徒のうちに基盤を求めて、その生活を全体として発展させることによつて、社会の要求する生活を形成していかななくてはならない。
- ・ 児童の生活は生きた統一ある全体的な一つの生活であるべきである。
- ・ 人間形成の教育は教科の障碍を除いた児童の全一的生活指導においてのみ可能である¹⁷⁾。

これらのことから、子どもの生活全体を一つのものと捉え教育していくといった理念や目標があると考えられることができる。

明石プランにおいては「教育は人間の生活過程である」との理念のもと、「児童の生活は常に学習過程である」「児童の学習生活は指導を必要とする」¹⁸⁾としており、彌生プランの理念や目標と類似していることが分かる。

金大附小プランにおいては「児童一人一人に望ましい社会生活の各面にわたっての理解や態度や能力をつけさせなければならない」との理念のもと、「社会生活と個人的基礎能力に分類して、望ましいもののそれぞれ项目的に列举し、次のごとき教育の一般目標を定めた」¹⁹⁾と、社会生活について25項目、個人的基礎能力について9項目を設定している。なお、彌生プランや明石プランに見られる「生活」の捉え方については、「我々がこの目標を設定するに当り、各種の参考文献を研究したのであるが、それによれば、生活を個人生活、社会生活、家庭生活、経済生活、職業生活などに分類しているものが多かった。しかし我々はこれを社会生活一本に統合したものである」²⁰⁾としている。つまり、児童の諸生活を社会生活として捉えたと解釈できる。この意味において彌生プランや明石プランと類似していると言える。

4-2 教育課程の考察と比較

彌生プランに見られる教育課程は生活問題解決の学習と

しての「中心学習」と、中心学習の基礎修練となり児童の経験発達を系統づける「基礎学習」から成り立っている。前掲の橋本主事は「現在最も進歩的な教課程が中心学習、基礎学習及び、選択学習をもつ全体計画によるものであるとする教育思潮に沿うたものである」²¹⁾と述べ、当時、梅根らが進める新教育運動（コア・カリキュラム運動）に呼応していることが推察できる。

梅根は「コア（core）というのは核とか、中核という意味で、リンゴや梨のまん中にある固いところのようなものであります。だからコア・カリキュラムというのは中核課程などと訳されている」として、「コア・カリキュラムがあれば、そのまわりに必ずこれを取りまく部分、すなわち周辺カリキュラムがある」²²⁾と述べている。

梅根はドイツの合科教授の運動とアメリカにおけるカリキュラム運動を対比させながら、当時のカリキュラム改造の変遷について「カリキュラム改造のうごき」²³⁾として表している（図1）。

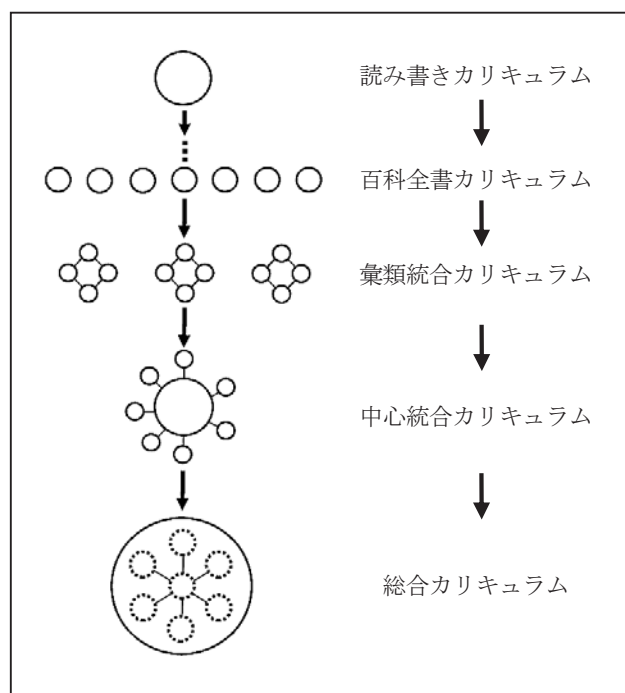


図1 カリキュラム改造のうごき（梅根, 1977）

彌生プランは「中心学習」を中心に、「基礎学習」がその周辺に配置され则认为られるので、図1の「中心統合カリキュラム」であると考えられることができる。

明石プランにおいては「中心学習と基礎学習は一本とし生活学習そのものとして学習を進める」²⁴⁾としていることから、図1の「総合カリキュラム」に該当するものと考えられることができる。

金大附小プランにおいては「中心課程」と「教科的課程」を並置するカリキュラム構成を採っている。これは「最近、コアカリキュラムが批判され、児童の実力云々の声も

大きい。あれこれ考えるとき我々の道も一つの妥当性もちがはしないだろうか⁸⁹⁾と述べている。このことから図1のカリキュラムには当てはまらないと考えられる。

なお、彌生プランが作成されたのは1948年で、金大附小プランが作成されたのは1950年である。後発の金大附小プランは、当時の我が国の教育情勢を背景に独自の考え方で教育課程を編成したことが次の文からも推察できる。「中心課程に配するに、教科課程とせずに教科的課程とした理由が多少問題になるかも知れない。(中略：筆者)などと教科の立場に一應立ちながらも、それは常に中心課程との関聯で変形していく。我々はこれを従来の教科と区別して教科的課程と名づけるのである」⁹⁰⁾。

4-3 単元に見られる教育の特徴

彌生プランにおける各学年の単元の計画から単元名を抜き出すと表1のようになる。

表1 各学年の単元名

	第1学年	第2学年	第3学年
1	おともだち	学校	役に立つ動物
2	つよいからだ	お医者さん	金澤の夏
3	たべもの	町を守る人々	町と村
4	のりもの	お店やごっこ	交通通信機関
5	おうち	ゆうびん	金澤の冬

	第4学年	第5学年	第6学年
1	金澤の歴史	天然資源の開発	新聞とラジオ
2	郷土の気象	農業生産	日本工業の復興
3	交通、通信の発達	現代の交通運輸	我が国と関係の深い国
4	郷土の資源	都市の発達	新しい政治
5	雪と生活		

第1学年と第2学年においては「自分」「友達」「家族」「働く人」といったように、現在の生活科の内容との共通点が多いという特徴を見出すことができる。

第3学年と第4学年においては、「生き物」「自然」「町の様子」「私たちの暮らし」といったように、現在の理科・社会科の内容との共通点が多く、第5学年と第6学年においては「日本の様子」「農業」「工業」「政治」といったように、現在の社会科の内容との共通点が多いという特徴を見出すことができる。

明石プランにおいても「児童の現実の生活、郷土社会の現実から取り上げられていることである。郷土社会とは児童の生活領域の発展と共に『家庭と学校私たちの町ー明石市とその周辺ー日本及び世界』に次第に発展拡充する郷土社会である」⁹¹⁾と「全体的計画とその特色」の中で述べており、彌生プランにおける特徴と同様であると考えることができる。

金大附小プランにおける「単元一覧表」⁹²⁾を表2に示す。

表2 金大附小プラン単元一覧表

月	第1学年	第2学年	第3学年
4	たのしい学校	二年生になって	のりもの
5	よいこ	春の野山	
6	水あそび	私たちのからだ	町の暮らし
7	なつやすみ	夏のあそび	
9	虫とり	夏休み 近所の人々	いなかの暮らし
10	のりもの	おまわりさん	動植物と私たち
11	あきの山	おみせや	じょうぶなからだ
12	おいしゃさん お正月		
1	冬のあそび	ゆうびん	かべ新聞
2		大表現会	大昔の人々
3	もうすぐ二年生		

月	第4学年	第5学年	第6学年
4	私たちの郷土	美しい日本	報道
5	犀川と生活		日本の工業
6		衣食住の発達 我が国の住生活	
7		我が国の衣生活	
9	郷土の交通通信	我が国の食生活	世界の国々
10	郷土の工業		
11	郷土の商業	我が国の交通通信	
12		政治	
1	冬の生活		新しい日本
2	郷土のうつりかわり		
3			

第1学年から第6学年までを通観すると、学年が上がるに伴って単元の数が少しずつ減少する傾向にあると言える。

各単元の内容については、彌生プランにおいて見られる特徴とはほぼ同様であると言える。このことは「社会生活課程と日常生活課程は三年から分ける。低学年では日常的な習慣形成や日常プロジェクトが教育上極めて重要な位置を占め、社会科指導要領の内容もこうした性格が非常に強いことは誰もが知っていることである」⁹³⁾と示していることから、現在の「生活科」と「社会科」との区切りと同様に、第2学年と第3学年の間として捉えていることが推察できる。

以上のことから3つのプランに共通する教育の特徴は、「自分・友達」→「地域・町」→「市・県」→「日本・世界」と学習対象が広がっていくことにあることが分かる。

4-4 戦後と現代の学習論の比較

彌生プランを中心に、明石プラン、金大附小プランについて考察することにより、カリキュラム編成の拠り所となっているものは子ども中心の経験主義、すなわちコア・カリキュラムの考え方であることが明確になった。そして、低学年においては現在の生活科との共通性が見られること、中学年から高学年にかけては社会科、理科との共通性が見られることが分かった。

コア・カリキュラムは経験主義の考え方によるもので、学習論としては問題解決学習であった。その後に台頭したのが系統主義の考え方であり、学習論としては系統学習であった。この二つの考え方や学習論は戦後教育の大きな特徴であり、「問題解決学習と系統学習とが学習指導類型というには余りにも大きな、戦後教育思想に関わる二大潮流として、功罪ともども戦後の学習指導論に大きな影響を与えてきた」⁹⁰のである。

戦後70年が過ぎた今日、学習指導論としての問題解決学習と系統学習は、「系統学習か問題解決学習かの二者択一ではなく、それぞれの長所を取り入れて豊かな教育活動を展開していくこと」⁹¹ができる状況になっていると考えられる。このことは、系統学習の代表とも言える数学・算数の現行の教科書を分析した村井（2015）による「中学校の数学と小学校の算数を比べてみると、数学では『振り返り』が重視されており、算数では『身近な問題』『問題解決学習』『個に応じた学習』が重視されている」⁹²ことから認められる。

5 まとめと今後の課題

5-1 まとめ

戦後初期に民主主義の教育を実現しようと学校全体でカリキュラムを構成した学校の教育課程である彌生プラン、明石プラン、金大附小プランに見られる教育の理念や目標、計画などについて考察した結果、以下のことを明らかにすることができた。

- ・ 戦後初期の学校教育はアメリカ教育使節団の報告書及び文部省の新教育指針などによって子どもの個性が尊重され、それが具体化されたものが彌生プラン、明石プラン、金大附小プランである。
- ・ 3つのプランに共通して見られる教育の理念として「子ども中心の教育」の考え方がある。
- ・ 「子ども中心の教育」はコア・カリキュラムの考え方であり、子どもの生活全体を重視する「中心学習」とその周辺に配置される「基礎学習」の2つから成り立っている。
- ・ 金大附小プランもコア・カリキュラムの考え方に近いが、「中心課程」と「教科的課程」を並置している。

- ・ 彌生プランと金大附小プランにおける各学年の単元を比較すると、現在の生活科と社会科との区切りと同様に第2学年と第3学年の間として捉えている。

- ・ 3つのプランに共通する教育の特徴は、「自分・友達」→「地域・町」→「市・県」→「日本・世界」と学習対象が広がっていくことにある。

以上が3つのプランを考察することによって明らかになったことであるが、戦後初期に見られる学習論について現在の学習論と比較考察することによって、以下のことが分かった。

- ・ カリキュラム編成の拠り所となっているものは子ども中心の経験主義、すなわちコア・カリキュラムの考え方である。
- ・ コア・カリキュラムに見られる学習論は「問題解決学習」であるが、その後に台頭したのが「系統学習」である。
- ・ 現在においては、問題解決学習と系統学習の長所を取り入れた学習論となっていることが数学・算数の教科書分析からも認められる。

5-2 今後の課題

彌生プラン、明石プラン、金大附小プランのように、コア・カリキュラムの考え方による教育課程を編成した学校は他にいくつもある。船山は「コア・カリキュラム構成を実践した著名校として、埼玉県川口市の『川口プラン』、広島県本郷町の『本郷プラン』、福岡県久留米市の『総合生活学習』、福島県郡山市金透小学校の『生活教育』、東京都港区桜田小学校の『桜田プラン』、千葉県館山市北条小学校の『北条プラン』、神奈川県福沢小学校の『福沢プラン』、新潟第一師範学校男子部附属小学校の『生活カリキュラム』、奈良女高師附属小学校の『しごとの実践』、甲府市北中学校の『生活学習』などがあった」⁹³と述べていることから、原本あるいはその写しをもとに、本研究によって明らかになった知見と比較したり新たな価値づけを行ったりしていくことを課題としたい。特に、奈良女高師附属小学校の『しごとの実践』は、小田切（1998）が「新教育の中で重松鷹泰を中心に構想された『奈良プラン』の、『しごと』『けいこ』『なかよし』のカリキュラム構成に基づく学習、とりわけその『しごと』学習に引き継がれてきているところであり、現在に至っている」⁹⁴と述べていることから、取り出して考察を行いたいと考える。

また、彌生プランは1948年に当時の石川師範学校男子部附属小中學校が作成したものであるが、2年後の1950年には金澤市立弥生小學校となり、新たに「彌生教育課程」を作成していることから、彌生プランとの比較を行うことも課題としたい。

注

- (1) 文部省 (1946-1947), 『新教育指針』, p.61 国立国会図書館デジタルコレクション, <http://dl.ndl.go.jp/info:ndlpi/d/1281779> (参照日2017.11.24)
- (2) 前掲書, p.61
- (3) 文部省 (1947), 『学習指導要領 (試案)』, 国立教育政策研究所学習指導要領データベース, <https://www.nier.go.jp/guideline/> (参照日2017.12.1)
- (4) 中野 光・平原春好著 (1997), 『教育学〔補訂版〕』, 有斐閣Sシリーズ, pp.109-110
- (5) 東京 国民教育社 (1946), 『アメリカ事情叢書 合衆國教育使節團報告書 第三輯』, p.29
- (6) 寄田啓夫・山中芳和編著 (2002), 『日本の教育の歴史と思想』, ミネルヴァ書房, pp.154-155
- (7) 安彦忠彦編 (1999), 『新版 カリキュラム研究入門』, 勁草書房, pp.21-22
- (8) 梅根 悟著 (1977), 『梅根悟教育著作選集第6巻 コア・カリキュラム』, 明治図書出版, p.79
- (9) 船山謙次著 (1960), 『続 戦後日本教育論争史』, 東洋館出版, p.15
- (10) 兵庫師範女子部附属小学校著 (1949), 『小学校のコアカリキュラム—明石プラン—』, 誠文堂新光社, p.4
- (11) 石川師範学校男子部附属小中学校 (1948), 「石師彌生プラン 計画と実際篇 (昭和二十三年度・試案)」, 序のページ
- (12) 前掲書9, p.20
- (13) 矢川徳光 (1973), 『矢川徳光教育学著作集』, 青木書店, p.141
- (14) 前掲書9, p.39
- (15) 国分一太郎著 (1956), 『教師—その仕事—』, 岩波新書, p.172
- (16) 前掲書13, p.207
- (17) 前掲書11, 序のページ
- (18) 前掲書10, p.4
- (19) 金澤大学石川師範学校附属小学校 (1950), 「研究叢書第三集 教育課程表 第五六學年」, 山越昭和印刷所, pp.2-3
- (20) 前掲書, p.3
- (21) 前掲書11, 序のページ
- (22) 前掲書8, pp.24-25
- (23) 前掲書8, p.79
- (24) 前掲書10, p.6
- (25) 前掲書19, p.6
- (26) 前掲書19, p.6
- (27) 前掲書10, p.9
- (28) 金澤大学石川師範学校附属小学校 (1950), 「研究叢書第一集 教育課程表 第一二學年」, 山越昭和印刷所, p.9
- (29) 金澤大学石川師範学校附属小学校 (1950), 「研究叢書第一集 教育課程表 第三四學年」, 山越昭和印刷所, p.8
- (30) 大森照夫編著 (1978), 『新しい社会科指導法の創造』, 学習研究社, p.36
- (31) 谷田貝公昭・林 邦雄・成田國英編 (2004), 『教育方法論』, 一藝社, p.24
- (32) 村井万寿夫 (2015), 「教育課程とカリキュラムマネジメントについての一考察」, 研究紀要, 第39号, 石川県教育工学研究大会研究発表論文集, p.44
- (33) 前掲書9, p.20
- (34) 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会編 (1998), 『奈良の学習法 「総合的な学習」の提案』, 明治図書, p.1

参考文献

- JON LOUIS HONE 著・石井登美譯 (1949), *The EDUCATION OF YOUR CHILD* (邦訳『教育の設計』), 中和書院
- 金澤市立弥生小学校 (1950), 「研究紀要二 彌生教育課程」, 山越昭和印刷所
- 船山謙次著 (1958), 『戦後日本教育論争史—戦後教育思想の展—』, 東洋館出版
- 激動・昭和の石川人物誌編集委員会 (1981), 『激動・昭和の石川人物誌 (教育編)』
- 明星大学戦後教育史研究センター編 (1993), 『戦後教育改革通史』, 明星大学出版部
- 石川県教育振興会 (2000), 『戦後教育を草創した教師たち』, 正和工業所印刷部